

## アレクサンドリアのフィロンの幸福理解

著者	原口 尚彰
雑誌名	教会と神学
号	45
ページ	21-36
発行年	2007-11-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024320/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024320/</a>

# アレクサンドリアのフィロンの 幸福理解\*

原 口 尚 彰

## 1. 問題の所在

幸福論は古典古代の倫理思想にとり重要な主題であり、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』は著作全体が、善と徳と幸福の概念の分析にあてられている。アリストテレスによれば、幸福 (εὐδαιμονία) ということは、より上位の目的を持たない最高善であり、それ自体が人生の究極目的である (『ニコマコス倫理学』1094a-1095a)。ギリシアの倫理思想は、如何にして善く生きるかについての教説であると同時に、如何にして真の幸福に到るかについての教説であったと言える (『ニコマコス倫理学』1094a-1095a; 1097b-1098a を参照)。紀元1世紀のユダヤ人哲学者アレクサンドリアのフィロンは、まとまった幸福論を著してはいないが、彼の著作は様々な箇所ですぐに幸福の観念に言及しており、幸福の観念は彼の人間観や倫理思想における重要な主題の一つとなっていた。

他方、旧約・ユダヤ教は幸福の観念についての理論的考察をすることはしないが、祭儀や倫理的勧告等のコンテキストにおいて、人間の

---

\* 本稿の作成にあたっては、日本学術振興会の平成19年度(2007年度)科学研究費基盤研究費(c)による補助を受けている。

幸いを宣言する文学的伝統を持っていた（詩 1: 1-2; 2: 12; 32: 1-2; 33: 12; 34: 9; 40: 5; 41: 2; 65: 5; 84: 5-6; 94: 12; 106: 3; 119: 1-2; 127: 5; 128: 1-2; 137: 8-9; 144: 15; 146: 5; 箴 3: 13; 8: 32-34; 16: 20; 20: 7; 28: 14; ヨブ 5: 17; コヘ 10: 17; トビ 13: 15-16; シラ 14: 1-2, 20; 25: 8-9; 48: 11; ソロ詩 6: 1; 10: 1; 17: 44; 18: 6; エチ・エノ 58: 2; 81: 4; 82: 4; スラ・エノ 42: 6-14; 52: 1-15; モーセ昇 10: 8; 4Q185 と 4Q525)<sup>1</sup>。フィロンはギリシア・ローマ世界に生きるユダヤ教思想家として、ヘレニズムの哲学や倫理思想の概念を通して、旧約聖書の箇所を再解釈し、ユダヤ教が信頼するに足る宗教であることをヘレニズム世界の知識層に対して示そうとした<sup>2</sup>。フィロンの幸福論は旧約・ユダヤ教に由来する幸いの宣言の伝統と、ギリシア哲学に由来する理論的考察が結合したものであり、彼はユダヤ教こそが人が真に幸いになる道であることを哲学的考察によって提示しようとしたのである。本論考は、フィロンの幸福理解における旧約・ユダヤ教的要素とヘレニズム的・哲学的要素の結合を分析し、幸福論に現れた彼の思想構造の特色を明らかにすることを目指す。

<sup>1</sup> W. Käser, "Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus," *ZA W* 82 (1970) 229; W. Janzen, "'Ašrê in the Old Testament," *HThR* 58 (1965) 224-226; E. Lipsinski, "Macarisme et Psalmes de congratulation," *RB* 75 (1968) 325-330, 353-354; 拙稿「死海写本 4Q185 と 4Q525 における幸いの宣言 (אשרי 定式)」『教会と神学』第 42 号 (2006 年) 41-68 頁を参照。

<sup>2</sup> P. Borgen, "Philo of Alexandria," *ABD* 5. 337-339; idem., *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time* (Leiden: Brill, 1997) を参照。

## 2. 語学的分析

フィロンは幸いの観念を表現するにあたり、μακαρ-語群とεὐδαιμ-語群の両方を用いる。同様なことは、フィロンとほぼ同時代のユダヤ人歴史家フラビウス・ヨセフスの諸著作にも認められる。この点は、ヘレニズム世界の一般的慣行に合致しており、幸いの観念を専らμακαρ-語群によって表現する七十人訳聖書の態度とは異なる、ヘレニズム・ユダヤ教的用語法の特徴となっていると言える。これは、ヘレニズム・ユダヤ教の著作が、ヘレニズム世界の知識人を読者に想定しているので、ヘレニズム世界の言語習慣や概念世界に自ずと近付いて行くためである。

フィロンはμακαρ-語群のうち、主として形容詞μακάριος(『世界の創造』135, 146, 172; 『十戒各論』2.141, 230; 3.178; 『アブラハム』87, 202; 『アベルとカインの供え物』101; 『神の不動性』108; 『夢』1.50)と名詞μακαριότης(『アブラハム』115, 202; 『夢』1.94; 『モーセの生涯』2.184; 『律法の寓意的解釈』3.205; 『アベルとカインの供え物』27)を用いており、名詞μακαρισμόςを一回しか用いず(『夢』2.264)、名詞μακαρίαは全く用いていない<sup>3</sup>。

彼はεὐδαιμ-語群をμακαρ-語群とほぼ同義で用いており、両者を並べて対句として用いることもしばしばである(『世界の創造』135;

<sup>3</sup> 本稿のフィロンの著作への言及や引用は、*Philonis Alexandrini opera quae supersunt* (ed. L. Cohn/P. Wendland; Berlin: de Gruyter, 1962) に基づいている。引証箇所は、同書の索引と P. Borgen/K. Fuglseth/R. Skarsten, *The Philo Index: A Complete Greek Word Index to the Writings of Philo of Alexandria* (Grand Rapids: Eerdmans; Leiden: Brill, 2000) により検索している。

172; 『十戒各論』 1.230; 2.141; 『アブラハム』 115; 『神のものの相続人』 111, 285; 『徳論』 205; 『栽培』 35)。フィロンは *εὐδαιμ*-語群のうち、形容詞 *εὐδαιμων* (『世界の創造』 156; 『神のものの相続人』 285; 『夢』 1.91; 2.38; 『アベルとカインの供え物』 125; 『カインの子孫』 72, 80, 104; 『悪は善を襲う』 8, 48, 49, 90; 『賞罰』 60; 『自由であること』 41) と名詞 *εὐδαιμωνία* (『世界の創造』 144, 150; 『徳論』 205; 『悪は善を襲う』 86) または *εὐδαιμωνισμός* (『十戒各論』 1.224; 2.7, 199; 『神のものの相続人』 110; 『夢』 2.38) に加えて、動詞 *εὐδαιμονέω* (『自由であること』 44) または *εὐδαιμονίζω* (『アベルとカインの供え物』 41, 124) を用いている。

神の形容として 七十人訳や (詩 1: 1-2; 2: 12; 32: 1-2; 33: 12; 34: 9; 40: 5; 41: 2; 65: 5; 84: 5-6; 94: 12; 106: 3; 119: 1-2; 127: 5; 128: 1-2; 137: 8-9; 144: 15; 146: 5; 箴 3: 13; 8: 32-34; 16: 20; 20: 7; 28: 14; ヨブ 5: 17; コヘ 10: 17), 新約聖書において (マタ 5: 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11; 11: 6; 13: 16; 16: 17; 24: 46; ルカ 1: 45; 6: 20, 21, 22; 7: 23; 10: 23; 11: 27, 28; 12: 37, 38; 14: 14, 15; 23: 29; ヨハ 13: 17; 20: 29; 使 20: 35; ロマ 4: 7, 8; 14: 22; I コリ 7: 40; ヤコ 1: 12, 25; I ペト 3: 14; 4: 14; 黙 1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14), *μακαρ*-語群は人間の形容として用いられるのが通例であり、神の形容に用いられるのは全く例外的である (I テモ 1: 11)<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 拙稿「死海写本 4Q185 と 4Q525 における幸いの宣言(𐤒𐤕𐤍 定式)」『教会と神学』第 42 号 (2006 年) 41-68 頁; 同「使徒教父文における幸いの宣言」『東北学院大学

しかし、フィロンや(『世界の創造』135; 146; 『十戒各論』2.141, 230; 3.178; 『アブラハム』87, 202; 『アベルとカインの供え物』101; 『神の不動性』108), ヨセフスは(『ユダヤ古代誌』10.278; 20.27; 『ヨセフス自伝』2.190), 神の形容としても *μακαρ*-語群をしばしば用いている。この点は七十人訳や新約聖書よりも、ヘレニズム文献の慣行の方に合致する(ホメロス『イリアス』1.339; 『オデュッセイア』5.7; ヘシオドス『労働と日々』136; ピンダロス『オリンピア頌歌』1.52; アリストテレス『ニコマコス倫理学』1178b 他)<sup>5</sup>。聖書の読者には奇異に思われる用語法も、ヘレニズム世界の用語法では余り抵抗なく、受け入れられるのである。

他方、フィロンや(『世界の創造』135; 『十戒総論』104; 『十戒各論』1.209, 329; 『アブラハム』87, 202; 『賞罰』35; 『神の不動性』108), ヨセフスは(『ユダヤ戦記』4.114; 8.126), *εὐδαιμ*-語群を神の形容として用いるが、これは七十人訳や新約聖書には全く見られない用法である。また、フィロンは *εὐδαίμων* を *μακάριος* とほぼ同義で用いており、神の属性の形容に際しても両者を並べて対句として用いることがある(例えば, *ἀπὸ τῆς μακάριας καὶ εὐδαίμονος φύσεως* 「至福で幸福な本質より」『世界の創造』135; さらに, 『十戒総論』104; 『十戒各論』1.329; 2.230; 『アブラハム』87; 『神の不動性』108 を参照)。

人間の形容として フィロンは, *μακαρ*-語群を幸福な人間(『夢』1.50; 『賞罰』63), 幸福な生活(『世界の創造』172; 『神のものの相続

キリスト教文化研究所紀要』第25号(2007年)33-48頁を参照。

<sup>5</sup> F. Hauck, “*μακάριος* κτλ,” *ThWNT* 4.365-367; *PGL*, 821.

人』285;『徳論』205), さらには幸福な家(『アブラハム』115)の形容に用いている。同様に、ヨセフスも *μακαρ*-語群を幸福な人間(『古代誌』2.137; 4.116, 118; 6.36; 9.264; 『戦記』5.461; 19.97; 『自伝』), 民族(『古代誌』8.120, 173), 魂(『戦記』7.346), 生活(『古代誌』1.42; 『戦記』12.303)について使用している。

ヘレニズム文献や(ホメロス『デーメーテル讃歌』480-483; 『オデュッセイア』24.192; ピンダロス『オリンピア頌歌』7.11; 『ピトニア頌歌』5.20; 5.46-49; エウリピデス『アルケースティス』915 他)<sup>6</sup>, 七十人訳や(詩1: 1; 32: 1-2; 119: 1-2 他)新約聖書に(マタ5: 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11; 11: 6; 13: 16; 16: 17; 24: 46; ルカ1: 45; 6: 20, 21, 22; 7: 23; 10: 23; 11: 27, 28; 12: 37, 38; 14: 14, 15; 23: 29; ヨハ13: 17; 20: 29; ロマ4: 7, 8; 14: 22; Iコリ7: 40; ヤコ1: 12, 25; Iペト3: 14; 4: 14; 黙1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14)見られるような, *μακάριος* を詩文の文頭に置く用例もフィロンに見られるが, その数は余り多くない(『十戒各論』4.115; 『夢』1.50; 『賞罰』63)。他方, フィロンには *ευδαίμων* を文頭に使用する文例も少数だけが見られる(『モーセの生涯』1.159; 『改名』185; 『夢』2.146)。フィロンは文学的伝統として幸いの宣言を知っていたが, この文学形式を用いて修辭的な効果を挙げることには余り関心がなく, むしろ幸いの觀念の哲學的考察の方に重きを置いていると言える。

<sup>6</sup> H.D. Betz, *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985) 30-33; idem., *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 93-97.

他方、フィロンは人間の幸いを表現するに際して、*εὐδαιμ*-語群の方をよりしばしば用いており、この点もヘレニズム文献の傾向に一致する。形容詞 *εὐδαίμων* (『世界の創造』152, 156; 172; 『農耕』25; 『悪は善を襲う』8, 48, 49, 90; 『ケルビム』41; 『酔い』100; 『混乱』177; 『神のものの相続人』111, 285; 『改名』51, 185; 『夢』1.190; 2.146, 147; 『モーセの生涯』1.159, 193; 『賞罰』60, 63; 『出エジプト記問答』122) と名詞 *εὐδαιμωνία* (『世界の創造』150; 『十戒総論』100; 『十戒各論』2.235; 『徳論』205; 『神の不動性』55, 92; 『栽培』35, 37; 『自由であること』41) を主として用いている。フィロンは人間の生活のみでなく、人間の活動の場である都市や (『カインの子孫』104) 地方 (『モーセの生涯』1.209) も幸いと呼んでいる。

ヨセフスも *εὐδαιμ*-語群をしばしば用いており、語群を幸福な人間 (『古代誌』3.274; 5.213, 254; 7.84; 『戦記』1.490; 4.385; 『自伝』1.273), 民族 (『古代誌』8.120), 生活 (『古代誌』1.20, 46, 98, 273; 2.102; 3.84, 88; 12.303), 地方 (『古代誌』1.239; 7.337; 『戦記』2.385; 4.483; 7.143) について使用している。使用する品詞の別から言えば、ヨセフスは形容詞 *εὐδαίμων* (『古代誌』1.20, 46, 98, 273; 2.102; 3.84, 88, 274; 5.213, 254; 7.84; 12.303; 『戦記』1.490; 2.385; 4.385.483; 7.143; 『自伝』1.273), 名詞 *εὐδαιμωνία* (『古代誌』1.14, 142, 223; 2.168, 170, 201; 3.308; 『戦記』1.11, 68, 69; 2.250, 258; 3.29; 4.615), 動詞 *εὐδαιμονέω* (『古代誌』1.41, 44, 69, 113, 143, 161, 228; 2.85, 92, 213; 『戦記』5.461; 7.133, 242; 『自伝』1.224), さらに、動詞 *εὐδαίμονίζω* (『戦記』7.353, 372) を主として用いている。



### 3. 神の幸いと人間の幸い

神の幸い フィロンは幸い（至福）であることを、神の本質的属性と見ている（『世界の創造』135；『十戒各論』1.329；『アブラハム』87, 202；『神の不動性』108；さらに、ヨセフス『ユダヤ古代誌』10.278；20.27；『ヨセフス自伝』2.190 も参照）。こうした理解は、旧約・ユダヤ教の神理解よりも、ギリシア哲学における神の属性の理解と一致する（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1178b）。旧約聖書の神理解では、神は聖であり（レビ 19：2；20：7；イザ 1：4；5：16；6：3 他）、義であり（詩 7：11；11：8；119：137；145：17；エレ 12：1）、真実である方として（申 7：9；32：7；詩 145：13 他）、讃美さるべきであること（創 9：26；14：20；詩 18：26；28：6；41：13；106：48；144：1 他）が強調され、神が幸いであるとは言われぬ。旧約聖書が神を論じるときは、常に人間との関わりにおける神の行為を問題にし、抽象的に神の属性について理論的考察をする訳ではないからである。これに対して、ギリシア思想は純粹の幸いの觀念の究極的境地を考察する結果、神の幸いの觀念に行き着く。

人間の幸福を損なうものは、人間の生活に固有な悲しみや苦しみ、さらには、死の運命であるが、ギリシア的神理解によれば、神は不変、不死、永遠であり（アリストテレス『形而上学』1071b-1072b を参照）、幸福を損なうものから全く自由である。同様に、フィロンによれば、神が幸い（至福）であるのは、人間と異なり不死、永遠であるためであり（『世界の創造』135；『十戒各論』1.329；『アブラハム』87；『カインとアベルの供え物』101）、神は悲しみや苦しみから自由であるからで

ある（『アブラハム』202）。

但し、フィロンはギリシア的な神々の世界を信じている訳ではない。彼は旧約聖書の神理解を出発点として、神は唯一であり（『世界の創造』171, 172；『言語の混乱』171）、創造主であり（『世界の創造』7, 13-15, 55）、真実である（『律法の寓意的解釈』3.204；『改名』182）と論じる。しかし、神の属性を考察するにあたって、彼はギリシア的な神概念である、不変性や永遠性、不動性を援用しながら、神の幸い（至福）を論じている。フィロンは旧約的神理解の哲学的拡張を行ったと言えるであろう。

**人間の幸い** フィロンは幸福論を創造論の中で取り扱い、神の幸いを世界の幸い、とりわけ、神の似姿に創られた人間の幸いの究極的根拠としている。神は自らの幸いなる属性を、創造行為を通して天体に付与し（『十戒総論』104）、聖霊を吹きかけることを通して人間の魂に分与したのである（創2：7；『世界の創造』135）。神は創造主として、創られたものが幸いな生活を送るように配慮している（『世界の創造』172）。こうした創造論的幸福理解はフィロン独自であり、旧約聖書の幸福論を超えた神学的思索を示している。

修辭的に言うと、幸福論は何が幸いであるかということを通して共同体の基本的価値観を提示する演示的機能と、人々に示す人々に幸いに到る方法を示して、それに従うように勧める助言的機能を持っている。旧約聖書の箴言や（箴3：13；8：32-34；16：20；20：7；28：14）、知恵の詩編に（詩1：1-2；2：12；32：1-2；33：12；34：9；40：5；41：2；65：5；84：5-6；94：12；106：3；119：1-2；127：5；

128: 1-2; 137: 8-9; 144: 15; 146: 5) 見られる幸いの宣言は、演示的機能と助言的機能の両方を内包している<sup>7</sup>。同様に、初期ユダヤ教の幸いの宣言にも二重の修辭的機能が認められる (トビ 13: 15-16; シラ 14: 1-2, 20; 25: 8-9; 48: 11; ソロ詩 6: 1; 10: 1; 17: 44; 18: 6 を参照)<sup>8</sup>。

フィロンの幸福論も、理想的な幸福を描く演示的機能 (アリストテレス『弁論術』1358b; キケロ『発想論』1.5.7; 『弁論家について』1.6.22; 1.31.141; 偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辭学書』1.2.2; クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.4.1-16) とそのことを通して黙示的に読者を幸いな生活へと招く助言的機能の両方を持っている。彼は知恵と節度と正義と勇敢さを備えた知者が幸いであると述べ、徳の実践が幸いを構成することを強調する (『アブラハム』219; 『自由について』41)。フィロンによれば、神への信仰こそが最大の徳であり、神にある生活は幸いな生活を送ることを意味する (『悪は善を襲う』48)。律法は神の言葉であり、その戒めは神意に適っている (『世界の創造について』143, 146)。しかし、理性により実在界を認識することを通して神の幸いな属性に倣うことが、幸いに達する道であると述べる点 (『アブラハム』58, 87, 202)、旧約聖書には見られない考え方を示している。旧約・ユダヤ教は、神が幸いを与えるという基本的考えを持っているが、幸いになる道として神の模倣を勧めてはいないのである。

<sup>7</sup> 拙稿「死海写本 4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号 (2006 年) 43-49 頁を参照。

<sup>8</sup> 同 53-56 頁を参照。

#### 4. 現世的幸いと来世的幸い

知恵文学的幸福理解とフィロンの幸福理解 旧約聖書の知恵文学は、知恵を求め、獲得する者に幸いを宣言し、知恵を得ることを勧める（箴 3: 13; 8: 32-34）。知恵の詩編では、知恵の内容が律法に集約され、律法を学ぶ者が幸いであるとされる（詩 1: 1; 32: 1-2; 119: 1-2 他）。フィロンの幸福理解にも同様な主知的側面が見られ、彼は知恵と節度と正義と勇敢さを備えた知者が幸いであると述べる（『アブラハム』219; 『自由について』41）。しかし、両者の幸いの理解には大きな差も見られる。旧約聖書の知恵文学の幸福理解には長寿や名誉や繁栄といった現世的要素が伴うのに対して（箴 3: 16; 詩 1: 3）、フィロンの幸福理解にはそのような功利的要素は少なく、高度に哲学的である。一般社会では、富や権力や名誉や身分の高貴さが幸いを構成すると考えられているが、フィロンによれば、それらのことは目に見える現象界での出来事に過ぎない（『アブラハム』219）。それに対して、魂は神の似姿に従って創られており、不滅である（『世界の創造』135）。目に見える不完全な過ぎ去るべき現象界ではなく、見えざる永遠のイデアの世界を認識し、神の幸い（至福）に与ることこそ幸いであり、目に見える世界において成功することが幸いなのではない。この点は、物事の本質に哲学的思索を加える観照的生活を神の至福に与ることと考えるアリストテレスの幸福観に平行する（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1178b）。但し、根底にあるフィロンの認識論は、アリストテレスのそれよりも、プラトンのそれに近い<sup>9</sup>。フィロンによれば、見

<sup>9</sup> この点については、H.A. Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philoso-*

えざるアイデア界を實在の世界を魂に内在する理性によって認識することこそが（プラトン『ティマイオス』28a-29d, 30c-31c）、幸いなのである（フィロン『世界の創造』135；『アブラハム』87, 202）。

**黙示文学的幸福理解とフィロンの幸福理解**      黙示文学における幸いの宣言は、地上的幸福観を逆転させ、終末時に与えられる幸いを語る（ダニ 12：1-3；エチ・エノ 58：2；81：4；82：4）。ダニエル書12章は終末時における大天使ミカエルの来臨と、その時に命の書に名が記されている義人に与えられる究極の幸いを描いている（ダニ 12：1-3）。エチオピア語のエノク書は、命の書に記された義人の死後の運命について幸いであると述べる（58：2；81：4；82：4）。スラブ語のエノク書 42：6-14 は、人生における成功や繁栄といった世俗的幸福よりも、来るべき世での永遠の幸福が語る。新約聖書の黙示録に出て来る幸いの宣言にも同様な終末的・来世的幸福理解が見られる（黙 1：3；14：13；16：15；19：9；20：6；22：7, 14）<sup>10</sup>。

これに対して、フィロンの幸福理解には、終末的・来世的要素は見られず、黙示文学的思想構造とは余り接点を持っていない。フィロンの思想においては、救いが成就する理想の世界が終末時にやって来る

---

*phy in Judaism, Christianity, and Islam* (2 vols; Cambridge, MA: Harvard University Press, 1962) 1.200-217; P. Borgen, "Philo of Alexandria," *ABD* 5. 339-341; D. Runia, *Philo of Alexandria and the Timaeus of Philo* (Leiden: Brill, 1996); C.M. Carmichael, *The Story of Creation: its Origin and its Interpretation in Philo and the Fourth Gospel* (Cornell University Press, 1996); J. Leonhardt-Balzer, "Creation, the Logos and the Foundation of a City: Opif. 15-25," in *Philo und das Neue Testament* (ed. R. Deines/K.-W. Niebuhr; WUNT 172; Tübingen: Mohr, 2004) 326 を参照。

<sup>10</sup> 拙稿「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号（2007年）48-57頁を参照。

のを待望する必要はない。真に実在する見えざる神を、神によって付与された理性によって認識することを通して、その永遠の本質に与ることが幸いなのであるから（『アブラハム』87, 202）、幸いは認識を通して現在到達可能である。

## 5. 結論と展望

(1) フィロンの幸福に関する用語法は、七十人訳聖書や新約聖書の用語法を大きく越えて、ヘレニズム世界の用語法に近づいている。例えば、彼は幸福の概念を表現するにあたって、*μακαρ*-語群だけでなく、*εὐδαιμ*-語群もほぼ同義で用いている（『世界の創造』135；172；『十戒各論』1.230；2.141；『アブラハム』115；『神のものの相続人』111, 285；『夢』1.94；『徳論』205；『律法の寓意的解釈』3.205；『栽培』35）。他方、フィロンは神の形容としても *μακαρ*-語群をしばしば用いている（『世界の創造』135；146；『十戒各論』1.209；2.141, 230；3.179；『アブラハム』202；『アベルとカインの供え物』101；『神の不動性』108）。ヘレニズム・ユダヤ教の著作は、ヘレニズム世界の知識人を読者に想定しているので、ヘレニズム世界の言語習慣や概念世界に自ずと近付いて行く傾向にある。

(2) フィロンのギリシア思想に対する態度は選択的であり、ある面は拒絶し、ある面は受容する。彼はギリシア的な神々の世界を断固拒絶する。彼は旧約聖書の神理解を出発点として、神は唯一であり（『世界の創造』171, 172；『言語の混乱』171）、創造主であり（『世界の創造』

7, 13-15, 55, 172; 『アブラハム』 58, 75, 88), 真実である (『律法の寓意的解釈』 3.204; 『改名』 182) と論じる。そこには、多神教的な神理解を容認する余地はない。しかし、神の属性を考察するにあたって、彼はギリシア的な神概念である、不変性や永遠性、不動性を援用しながら、神の幸い (至福) を論じている (『世界の創造』 135; 『十戒各論』 I 329; 『アブラハム』 87, 202; 『神の不動性』 108; さらに、ヨセフス『ユダヤ古代誌』 10.278; 20.27; 『ヨセフス自伝』 2.190 も参照)。フィロンは一神教的な神理解と矛盾しない哲学的な神理解は積極的に取り入れ、神学的思索を深めるのである。

(3) 旧約的神理解を出発点とするフィロンの思考は、創造神の概念を持つプラトン哲学と親和性が強い。神は創造主として、創られたものが幸いな生活を送るように配慮している (『世界の創造』 172)。こうした創造論的幸福理解はフィロン独自であり、旧約聖書の幸福論を超えた神学的思索を示している。フィロンによれば、見えざるイデア界を实在の世界を魂に内在する理性によって認識し (プラトン『ティマイオス』 28a-29d, 30c-31c), 神的世界に近付くことが幸いなのである (フィロン『世界の創造』 135; 『アブラハム』 87, 202)。アレクサンドリアの富裕なユダヤ人の家庭に育ち、ヘレニズム世界の教育を受け、ギリシア哲学の伝統に造詣が深いフィロンに取り、プラトン哲学を援用しながら、聖書の創造説話を解釈することも自らの思想の自然な展開であった。フィロンの思考には、旧約・ユダヤ教的な要素とヘレニズム的・哲学的要素が分かちがたく結合し、どちらが優先するのかを一義的に決定するのは困難である。

(4) アリストテレスによれば、幸福は一定の状態ではなく、徳 (*ἀρετή*) に従った魂の活動 (*ἐνέργεια*) である (『ニコマコス倫理学』1098b; 1102a を参照)。フィロンも徳の実践と幸福との結び付きを重視する (『アブラハム』47, 85, 114-115)。フィロンにおいて倫理的徳目は称揚すべきものとされているが、それ自体が目的ではなく、幸いに到る手段として勧められているのである。フィロンの倫理思想は同時に幸福論である点において、『ニコマコス倫理学』の論理構造に近い。

(5) フィロンの幸福理解には主知主義的であり、彼は知者が幸いであると述べる (『アブラハム』87, 202; 『自由について』41)。この点において、フィロンの幸福論は知恵を得ることを幸いに到る道とする旧約聖書の知恵文学と一致する (箴 3: 13; 8: 32-34; 詩 1: 1; 32: 1-2; 119: 1-2 他)。しかし、旧約聖書の知恵文学の幸福理解には長寿や名誉や繁栄といった現世的要素が伴うのに対して (箴 3: 16; 詩 1: 3)、フィロンの幸福理解ではそのような功利的要素は二次的である。一般社会では、富や権力や名誉や身分の高貴さが幸いを構成すると考えられているが、それらのことは目に見える現象界での出来事に過ぎない (『アブラハム』219)。フィロンによれば、不滅の魂は神の似姿に従って創られている (『世界の創造』135)。目に見える不完全な過ぎ去るべき現象界ではなく、見えざる永遠のイデアの世界を認識し、神の幸い (至福) に与ることこそ人間の最高の幸福なのである (『アブラハム』58)。

(6) フィロンの幸福理解には、ユダヤ教文書の一部や (ダニ 12: 1-



3; エチ・エノ 58: 2; 81: 4; 82: 4), 新約文書に一部が示す (黙 1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14), 終末的・来世的要素は見られず, 黙示文学的思想構造とは接点を持っていない。フィロンの思想においては, 救いが成就する理想の世界が終末時にやって来るのを待望する必要はない。真に実在する見えざる神を, 神によって付与された理性によって認識することを通して, その永遠の本質に与ることが幸いなのであるから (『アブラハム』 87, 202), 幸いは認識を通して現在到達可能である。こうしたフィロンの思考構造は, グノーシス主義の思考構造に近いが, 彼は被造世界を墮落した世界としてトータルに否定したり, 創造神を否定的に評価することはない。また, フィロンはグノーシス主義の著作が示すように宗教的想像力を巡らせて, 見えざる世界を神話論的に語ることをせず, 哲学的, 論理的考察に終始する。